
幼馴染は異世界から来たチートな魔法使いだから世界を救ってハーレムがうんたらかんたら(笑)

美希マコト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の幼馴染は異世界から来たチートな魔法使いだから世界を救ってハーレムがうんたらかんたら（笑）

【Nコード】

N6040V

【作者名】

美希マコト

【あらすじ】

数々の翻訳家や文学者そして科学者が投げ出し、もはや解説不能としていた書物の翻訳に、あの「マーカス・ニーデラント・如月」が20年もの月日を使用し翻訳、文章化した「俺の幼馴染は異世界から来たチートな魔法使いだから世界を救ってハーレムがうんたらかんたら（笑）」が今ここに完成。

「俺の幼馴染は異世界から来たチートな魔法使いだから世界を救ってハーレムがうんたらかんたら（笑）」

翻訳「マークス・ニーデラント・如月」

.....

「じ、実は……私は死んだお前の父さんの弟なんだ！」

「そ、そんなあ」

「惑わされてはダメよ！ そいつは私たち人類の敵よ！」

この戦いを終わらせるための方法が2つある——1つは俺が嫌いな食べ物である「マーボー茄子」を食べる事。そしてもう1つはフリースローラインからジャンプしてダンクを決める事。

暴落する株価と、揺れる憲法の解釈に翻弄される世界は優しく崩壊し始めている——僕は満足に残業代も請求できないまま、そして有休も使い切れないまま……崩れゆく過去と未来と現在が淡く混ざり合う世界を背に、僕は最後のS○Xに明けくれた。

2000年前に起こった壮絶な大陸戦争の記録は今でも確かに残されている。（裸エプロンはロマン）

僕らの生きた世界で起こった曲げる事の出来ない事実である。（直接肌にあたる布切れ）

悲惨な歴史を繰り返さない為、僕らは過去から学ばなければならない。（初めてのエロ本）

宇宙船地球号の乗組員として今後の人類の為にこの世界を守っていかなければならない。（禁断のDカップ解禁）

これから始まる――絶望的な運命を、僕が一人で蹴散らして見せる。（勃○なう）

早すぎる死を嘆く声が聞こえる。（けしからん乳）

残酷な死を恨み悲しむ声が聞こえる。（芸術的な曲線）
人間は脆く、弱い生き物である。（そしてこの美脚）

与えられた知恵の実は、余計な感情までも植え付けた。（面積の少ない下着）

「おはようございます」（膝上のスカート丈）

瞑想する僕の前に幼馴染が現れた。（ちっぱい）

がしかし、この展開に意味はないので時を進める事にする。（幼児体型に用は無い）

ここが2億年後の世界。（未来のエロ本）

情報の管理はより強固となった世界、すなわち「情報」そのものの価値は現代とは比べ物にならない。（エロロボット）

しかし理想が抱ける時代。（だから理想が抱ける時代）

完璧を求めた先の時代。（最高だぜ）

そしてココがこの話の終着点。（夏のブラ線）

「早く学校にいきましょう、今から」

僕の幼馴染の淫乱雌奴隷は秀才でありIQは8億を超える。(光る汗)

中々魅力的な提案は僕の一言により却下された。(露出するふともも)

「僕はこれから学校に行かなければならない、だから雌豚であるお前と登校することによって周囲から悪意ある視線を浴びせられるのはまっぴらさ——」

僕は興奮した。(僕は興奮した)

理由は今はまだ発言権がないため政を行うしか能がない山朱雀？参謀？は僕の手の内を熟知している、しかし僕の右手に握る肉棒の存在は山朱雀？参謀？は日常的にその行為を興味本位に騎乗位だ。(変態です)

「ほら、1時間目はSFよ」

紙をむしゃむしゃと食べる羊は僕に助言した。(ケモナー)

僕はわけも分からず数のお稽古道具からおはじき？を取り出して見せた。(授乳シーン)

「ほら、2時間目は新体操よ」

崖の上から落ちそうな体勢の隣の席に座る佐藤さんは器用にバランスを取りながら僕に進言した。(レオタード)

僕はわけも分からず机の奥底に眠る1カ月前のコッペパンをゴミ箱に捨てた。(開脚)

「ほら、3時間目はお昼寝の時間よ」

俺は彼女の顎をくつと持ち上げ、強引に口をふさいだ。

「あ……ふっ………やめ………」

漏れる吐息は脳を刺激し、俺をより攻撃的にさせた。

「や……こんなところで……」

「いいさ、誰も来ないよ」

彼女の体を弄りながら俺は背中にまわした右手で彼女のブラのホックを外した。

「いや……制服の上から外すなんて……」

落ちた水色のブラジャーを拾おうとする彼女の手を掴み、俺は彼女を壁際に押しつけた。

「どうしたの……なんだか怖いよ……」

彼女の髪の毛の匂いだけでなく、フェロモンとでも言うべきか艶めかしい香りに俺はもう居ても立ってもいられなくなる。

「今日はダメ日だから、ね……また今度に……」

「お前がいけないんだろ、お前が俺をその気にさせるから——」

俺は彼女のスカートを——

キンコンカンコーン♪チャイムが鳴った。

「ほら、4時間目は文化よ」

セル画を見つめるタクシードライバーは目に涙を溜めながら僕に教えた。（露出狂）

僕はわけも分からず辞書で卑猥な言葉にアンダーラインを引いた。
（林間学校）

「ほら、5時間目は茶道よ」

眼鏡っ子が僕に言った。（眼鏡っ子で僕はイッた）

僕は天にも昇る気持ちになった、今日はいいい日だ。（我が人生に一辺の……）

「ほら、6時間目のプールは雨により中止になったので、その代わりに盆栽よ」

男女の仲になったホステスから金を巻き上げられた件で裁判沙汰となった教頭先生は肩を落としながら僕に八つ当たりした。（付け過ぎた香水）

僕はわけも分からずプールサイドを走ってこけた友人を清掃されていないまだ緑色のプールに投げ落とした。（黒い下着）

「ほら、7時間目は調理実習よ」

風邪で学校を欠席をした日の夕方、突然のチャイムの音に少しビクリと肩が上がった。僕は重い体を動かし玄関のドアを開けた。

「せんぱいつ、私を——た・べ・て？」

視界に広がる不思議な光景に驚きを隠せない僕は声も出せずに膠着してしまった。

「せんぱあゝい、にゃゝん」

僕の腕に絡みついてくる女性の顔を直視することが出来ないが、こんな事するのは僕の所属するテニス部の1学年下のマネージャーしかないのだ。

「ま、まずいから！！とにかく部屋に入って——わっ
「きゃッ」

勢い任せにマネージャーの腕を引っ張ってしまったせいか、玄関に招き入れた瞬間にバランスを崩して倒れてしまった。

「いててて……」

一瞬暗転した視界に光が戻ってくる。

「せんぱい……」

普通は逆かもしれない、僕が下でマネージャーが上で……まるで僕が襲われているような状態になっている。

「もう……我慢できないよお」

甘ったるい声と子猫のような容姿のマネージャー、これまであまり意識をした事はなかったが——近くで見たマネージャーの顔は凄く可愛かった。

「せんぱいの風邪……わたしに移してえ……ちゅっ」

ただでさえ体温が高かった僕の体はマネージャーのいきなりのキスに沸騰してしまうほど熱くなった。

「こんな事されたら……僕」

「いいよ……我慢しなくて……」

耳元で囁くマネージャーの声に、僕の僕が我慢できなくなっていた。

「楽にしてあげるね、せんぱあい」

小悪魔のような笑顔で僕を見下ろすマネージャーは何の躊躇いも無く僕のパンツを——

キンコンカンコーン♪チャイムが鳴った。

「ほら、下校時間よ」

シュノーケルを付けた幼馴染は幼妻のようで秋刀魚はサンバのリズムでピチピチと荒ぶっていた。(柔肌)

僕はわけも分からず警察に出頭する生き別れの妹の無実を証明しようとした。(コスプレ)

西から上った太陽が東に沈み、雨は地面から空に舞い上がる。(必死フェチ)

僕らの世界はいつだって想像を超える。(焦りフェチ)

世界の何処かで今日も争いが起こっている。(軍服フェチ)
ここは、武力による争いが起こっていないだけ。(武装フェチ)

この石ころは、ただの石ころだ。(無邪気フェチ)
しかし、この石ころに意味を与えるのは君だ。(ちっぱい)

君が意味を与えてあげればいい。(ちっぱい)

それで世界が救えるのならば———(無乳)

学校の帰り道の話である。(痴漢)

「そこに行ってはいけない」

幼馴染の弁護士は今後の訴訟に向けて意気揚々である。(満員電車)

僕は方程式に苦戦した為、その先に待っていた連立方程式でも躓

いた。(密着)

「危ない!!」

幼馴染の公認会計士は書類の整理に追われていた。(不可抗力)
僕は8ビットを刻みながらビットアイランドに足を踏み入れた。
(擦れる)

狂気とは何度も同じことをくり返しながら何か違う結果が出る事を――期待することである。(ピストン運動)

「ここは、何処でしょうか」

気が付くと、無職になっていた。(自慰)

戦うのはネットの中だけ、サーフィンもネットの中だけ、言葉もネットの中だけ。(動画)

自堕落な生活により、心も体も汚れた僕は……親のすねをかじり続けていくだろう、死ぬまで。(賢者)

『第一章完結』

.....
【あとがき】

「俺の幼馴染は異世界から来たチートな魔法使いだから世界を救ってハーレムがうんたらかんたら(笑)」の翻訳させていただいた、マークス・ニーデラント・如月です。

今回は第一章部分のみの翻訳ですが、ここまでの作業に20年か

かってしまった事を、この場を借りましてお詫び申し上げます。

さて、今回の翻訳は非常に不完全な物であります。現在の私達の知識や科学では困難を極めました。よって適切ではない表現もあったかと思いますが、なるべく理解しやすい語句を用いて翻訳するように心がけました。

この「俺の幼馴染は異世界から来たチートな魔法使いだから世界を救ってハーレムがうんたらかんたら（笑）」第一章の私個人の感想といたしましては「人は支え合って生きている」という事柄を再認識させられたという点が1番の衝撃でした。

現在第2章の翻訳を開始しているのですが、これもまた非常に難解な内容になっているので、読者の皆さまには気長に待っていただきますたいと願うばかりでございます。きっと第2章も皆さんの想像を超える物語が待っていますよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6040v/>

俺の幼馴染は異世界から来たチートな魔法使いだから世界を救ってハーレムか

2011年10月8日23時30分発行